

創刊の辞

所長 鈴木 格 禪

本学に禪研究所が創設されたのは、昭和四十四年三月のことである。創設の中軸となったのは、禪の心理学的研究に精力を傾注されていた故秋重義治教授であり、初代所長は、時の総長故榎林皓堂博士であった。

昭和天皇が崩御されて年号が改った平成元年、禪研究所は既に二十余年を閲し、開設当初の主目的は概ね達成されたものの、他面、研究所が本来果すべき活動も業務も頗る沈滞し、僅かに紙上にその存在を留むるのみの状態であった。かかる景況に鑑み、規程を改め、組織も革めて、新たに発足せしむべきであるとの機運おのずから生じ、有志鳩首の上、方途を決定し、若干の準備期間を置いて、平成元年四月一日を期し、新規に開設せらるることとなった。まことに時の熟しであり、憂宗の熱き心の結集であったということが出来る。

近来、「禪」と称呼せられる仏教の研究は、欧米をはじめ、世界的規模において識者の関心を喚び、将来の人類文化に深くかかわる一箇の有力な指導原理として、俄かに注目をあつめ、その研究も急速に進展しつつある。

従来、日本における「禪」の研究は、当然のことながら、インドを起点とする中国・日本の三国を、豎に貫き横に拡って、深く人心を灌漑しつつ、歴史に生きた文化現象としての「禪」についての、学的研究に終始する傾向が顕著であった。しかも、その研究姿勢は多くの場合、「禪」の本面目であるところの、実践を主とする僧堂や宗師家からの、批判や発言を何処かに意識するか、乃至は、それを視野、もしくは射程距離に入れての発表が、その主流を形造っていた観がある。

もとよりこのことは、禪研究の基本であり、分つべからざる研究態度とその条件であるから、これに異論を挿む余地は毫末

もないものごとくであるが、禅研究の原野が、文化——したがって、これを醸成した風土をも含む意識や伝統、ないし言語等——を全く異にする世界的な規模や状況において求められるとき、その研究の範囲や方向が、旧来の枠の中にとどまり得ないのも、また、当然の帰趨であるといわねばならぬ。

平成元年十一月、花園大学で開催された第六十回禅学研究学術大会において、同大学の西村恵信教授は、アメリカ中西部ミネソタ州カールトン大学に客員教授として滞在中、大学図書館のデーター・ベースによつて、過去四十年間にわたる欧米での禅学に関する学術論文の発表数を調査し、これを年次別に表計して、その研究動向を分析した結果を、量と質との両面から報告された。

これを要約すると、「禅」を「宗教論文」と分類したデーターに随えば、禅そのものを論じたもの三五%、キリスト教との比較二三%、哲学上の問題二一%、比較研究六%、文化の問題六%、心理学的研究五%であり、「哲学論文」の分類によれば、哲学の問題三三%、禅の問題三〇%、比較研究二九%、キリスト教との比較三%、倫理的内容五%、心理学的内容一%である。而して、これらの論文を執筆した禅研究者の視点は、宣教的関心、創造的関心、世俗的関心の三類に整理することができる。宗教的関心を示す者については、さらに、「禅」をキリスト教信仰の深化に有効なるものとする立場と、反キリスト教として理解する観点に立つものとの二種があるという。創造的関心を示す人々は、ヨーロッパの精神風土の基調をなす伝統的キリスト教を超越し、新しいキリスト教の創建を主張しこれを目途とするところの、ラジカルな一群の神学者や宗教学者達と、「禅」の中に超宗教的な価値を見出し、それを統合の有力な論拠の一として、「普遍的宗教」を求め、これが創唱を摸索しつつける一群の人々に分たれるという。また、世俗的関心に基づくものとして分類されたのは、「禅」を宗教としてではなく現代の社会が内に深く抱く諸問題や、それがもたらすところの社会的病根、ないし、それによって発生する広狭両義にわたる病的諸現象に、直接間接、または根源的に対応し機能する一箇の原理として活用しようとするものであり、これにも、学問的な立場に依るものと、実践的立場を墨守しようとする者との二類があるという。

彼等の多くは、研究目標の基礎となる諸科学ならびに隣接分野についても、よくこれをマスターして自家藁籠中のものとなし、仏典を熟知し、中国語に通じ、且つ、坐禅をも実修する。その彼等の卓越した知性や意志が、新しい価値観の下に、時代の要請に応うべく「禅」を研究している。

このことは、禅研究の角度や方向が、禅の宗教的因習や伝統的な枠に一切拘束されない全く自由な立場にあり、そこから批判的に「禅」を研究しつつあることを意味する。すでに日本国内においてすら仏教ないし禅が、その社会的使命についての真価を問われ、ひそかに疑問を抱かれはじめて久しい。されば「禅」の研究が、時代の推移・社会の変容・人心の変化等に超然としたままの、独善と旧態依然の研究体勢を固持する限り、かつての栄光は化石となって歴史の中に埋没されてゆくほかはなかに相違ない。

しかしながら、欧米人学者の学的視野に捕捉されている「禅」は、なお、鈴木大拙博士等によって彼の地に紹介された「禅」が、その基底をなし主流となっているかの如くであり、永平道元の仏法を基盤とし正命とする「禅」は、わずかにその辺隅の一分を占むるにすぎない趣きがある。

道元禅師の仏法が、人類文化の発展と深化に資する根源的な一箇の力として、言語・慣習・気質・精神風土等の区々たる異質の文化圏の人々の中に、そのあるべき本来の宗教性の、正当な理解や把握において受容され、かつ、生きてはたらくものとなつてゆくためには、専門を異にする多くの学者や、このことに熱い志を抱く真摯な学徒たちの、奮起と協力による懸命の研究活動を、地道に持続しつづけてゆくほかにはないであろう。

道元禅師の仏法の根源を、より深く闡明し、これを不動のものとなすべき宗旨の学が宗学研究所の本務であるとすれば、禅研究所は、宗学研究所が所有し、そして果すべき本来の任務であるところの、信仰の学としての方向やその成果を十二分に内に含み、かつ、これに支援されつつ、広く世界に開かれた禅研究の中心として、各種多様な批判にも堪えうる学問と学風の樹立と創造に向つて邁進してゆくことをもって、その主務とするといつてよいであろう。それが、本学に創設され、そして新しく発足した「禅研究所」の、目的であり使命であると確信している。

『禅研究所年報』第一号には、きわめて優秀な少壮学者による卓抜した論文十篇を掲載することができた。衷心より厚く感謝の意を表す。それと共に、これを機により多くの俊英たちによって、『年報』が多彩に荘嚴され、研究所が、その光輝を一段と濃やかに放ち、さらに充実発展してゆくことを、心の底から希っていると云爾。